

# 大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

## Outcome report

計画名 Plan	ベンガル湾海域におけるタミル・ムスリムの越境移動に関する研究
氏名 Name	中島 咲寧
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	アジア・アフリカ地域研究研究科 東南アジア地域研究専攻 一貫制博士課程 2年
渡航国 Country	マレーシア
渡航日程 Travel schedule	2022年 12月 18日 ~ 2023年 4月 30日

- ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- 写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- 各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- 日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

### 渡航計画の概要 Outline of the travel plan

本渡航計画は、博士予備論（仮題目「ベンガル湾海域世界における越境のダイナミズム：マレーシアのタミル系ムスリム住民を事例に」）の執筆に向けたデータ収集を目的として実施された。本研究は、東南アジアの港市を中心に形成されるタミル系ムスリム住民のコミュニティが原郷である南インドとの間で維持してきた紐帯から、ベンガル湾海域世界という地理的ユニットを、国境や地域区分を超えた彼らの生活空間として描き出すことを目的とするものである。そこで本調査では、その事例としてマレーシア・ペナン島に在住するタミル系ムスリム住民に着目し、①彼らがインドとの間で維持してきた親族・商業・宗教ネットワークの実態を把握すること、②こうしたネットワークがどのように維持・展開され、またどのような役割を果たしてきたのかの概要を掴むことの2点を目標として、約4ヶ月半の現地調査を実施した。主な調査手法としては聞き取り調査及び参与観察を用いた。

調査の実施に当たっては、ジョージタウンを拠点にペナン島の遺跡や遺産、伝統文化の保全や継承活動を行う NGO 団体であるペナン・ヘリテージ・トラストの協力を得た。また、サンウェイ大学教養学部、南アジア・インド洋研究センター所属のクリスピン・ベイツ教授に現地カウンターパートをお願いし、適宜助言をいただきながら調査を進めた。

### 成果 Outcome

まず、ペナン在住のタミル系ムスリム住民たちの移住の時期や経緯に見られる大まかな傾向として、初めてペナンに移住し商業に従事し始めた世代を初代（主に20世紀初頭に移住）とした場合、現在その商業を継ぐ世代が3~4世代目であることが分かった。一方で、1~2世代目までは基本的に父親のみがペナンに拠点をもち妻子はインドに留まるという出稼ぎ形式の移民であり、一家での移住が一般的となったのはマラヤ連邦独立以降の1960~1980年代という比較的最近のことであるという事実も明らかになった。故に、3~4世代目の中にはインドで生まれて幼少期を過ごした経験を持つ人も多く含まれるが、4~5世代目の若年層に関してはほぼ全員が生まれも育ちもマレーシアであり、両世代間においてはインドとの紐帯やタミル文化への愛着などの面で認識の変化が生じている状態であることが読みとれた。

インドとの紐帯の維持については、マレー・ムスリムとの文化的同化やマレー人との通婚等を背景とした関係の断絶や希薄化も事実として見られる一方で、現在に続くインドとの繋がりがペナンに生きる彼らの生活に密接に関係している様子が読み取れた。例えば、ペナン在住の親族がインド在住の親族を配偶者に迎えたり、家業の手伝いや継承を任せる為に呼び寄せたり

して、新たにインドからペナンへの移民が生じるというケースが複数見られた。宗教実践の場においても、南インドに起源を持つムスリム聖者廟（ナグール・ダルガー）や、タミル系ムスリムの互助組織が所有するスラウなどで、タミル・ナドゥ出身のウスタやイマームが迎え入れられ、その業務に当たっている様子を確認した。また、ペナン在住のタミル系ムスリム住民の間でもインドの出身村落に基づく紐帯が重要な役割を果たしており、出身村落を共有する人々から成る地縁団体が複数存在することがわかった。ラマダン月を迎えた3月下旬以降、タミル系ムスリム住民を主な構成員とする様々な組織・団体によって断食明けの食事会が開催され、報告者も何度か出席する機会を得たが、そこでの参与観察からは同じタミル系のムスリムである彼らの間で、出身村落に基づく棲み分けが存在していることが読み取れた。

## **今後の展望** Prospects for the future

今回の調査を通じて、ペナン在住のタミル系ムスリム住民に関する、移住の経緯や時期といった基礎的な情報の把握、並びに課題①として設定した親族関係や商業、宗教の場面にみられるインドとの紐帯の把握については、おおむね目標を達成出来た。一方で、課題②として設定したネットワークがどのように維持・展開され、どのような役割を果たしているのかという点については、自分のタミル語運用能力の制限もあり、より深い内容に切り込めない部分が多かった。また、ベンガル湾海域を跨ぐネットワークの様相を掴むうえでは、ペナン側の事情のみならず、インド側、つまりは彼らの出身村落側における事情も観察の対象とすべきと感じた。よって今後は、タミル語の運営能力の向上に努めるとともに、インドにおける彼らの出身村落での現地調査も視野に、より包括的に彼らのネットワーク展開の様相を掴むこと目指したい。



写真：タミル系ムスリム住民が営む両替商や宝石店が立ち並ぶ通りの様子。殆どが19世紀末から20世紀初頭に創業され、各店舗の店主は多くの場合でイトコ同士や遠縁の親戚同士である。（2023年2月3日、報告者撮影）